第二回保育参加ウィーク「四勝一敗」

入江　礼子

第一回保育参加ウィークを振り返って

保育の方針を少しでも子ども主体の方向にシフトしたいと努力し始めて八ヶ月。昨年の十一月末から十二月初めにかけての一週間、第二回目の保育参加ウィークを行った。前回の保育参加ウィークについては本誌一〇〇巻第十号に書かせて頂いた。それから半年弱が経ったことになる。

前回はマジックミラーを使っての保護者の保育観察日を廃止しての新しい試みの第一回目だった。その結果「三勝二敗」という言葉で表現させて頂いたように、この行事に参加しての感想は肯定的なものと否定的なものが相半ばし、かろうじて肯定的な意見が多く出された日が多かったというものに終わった。肯定的

な意見は保育に参加して下さった保護者から出されることが多く、否定的なものは保育を参観してくださった方から出されることが多いという特徴もその時明らかになった。また「先生の働きかけが弱いのではないか。もう少しかかわると子どもたちがもっと楽しく過ごせると思いますよ」「お部屋のなかがなんだかがらんとしてお部屋にいる子どもたちもいるのだけれど、なんだかてもちぶさただったみたい。先生方もみんな外に出払っているので、私、一緒に遊びました」等々、今の私たちの保育で抜けたり、欠けたりしているところを鋭く突く意見も出された。私たちとしては、本当は園を保護者に開放するのはもう少し保育の質が上がってからにしたいというのが本音であった。しかしあえてそこで発想を切り替えて「ありのままを見てもらって話し合ってみよう」ということにしての結果が「三勝二敗」ということだったのである。

前回は年中組の保護者たちが幼稚園に慣れ始めている我が子の姿を見て安心したことで、肯定的な意見を多く出して下さる方も多かった。しかし子どもたちが園生活に慣れた今回は前回以上に保育の内容について目が向くことも予想され、保育参加ウィークを実施するにあたっては私たち自身の保育の質を少しでも高める必要があることは明白だった。

しかしながら、保育の質を上げるといってもそれは一朝一夕にできるものではない。日々牛の歩みを続けていくしかないという辛さもあった。そのうえ二学期は行事が目白押しである。九月末の運動会、十月末の生活発表会、十一月半ばの作品展。どれをとっても普段の子どもたちの園生活を保障しながらやっていくにはしんどすぎる。そこで職員会議で話し合って、昨年は十月に行った生活発表会を二月に先送りすることに

した。運動会は初等部と合同、作品展は幼稚部から大学までの学園祭の一環であり、幼稚部の判断だけで動かすことはできない。そこで唯一動かせる生活発表会を先送りしたのである。

第二回保育参加ウィークまでの経過

◇九月

こうして二学期が始まった。しかし運動会の練習が始まると、特別に配慮を必要とする子どもたちが目立つことが多くなった。運動会の練習が、大きい集団とそれからはみ出た個という構造を作ってしまい、大きい集団に属する方も集団に呼び込む働きかけしかせず、さらにそれでも参加しない場合、子どもたちの中に「○○ちゃんは一緒に来ない子、困った子」という「はみ出る子どもたちを作る構造」になってしまったということだ。これは私たちの保育を再考する良いチャンスだ。そう考え、園内研修でこのような状況を作ってしまった根本を考えるために、それぞれの保育者が自分の園での役割をどう考えているかを話し合った。

担任を持つ保育者からは「今まではいつも前年と同じことをやっていた。自分で変えようという気もなく、自分のなかにアイディアもない。考える力も乏しかったのだと実感した。今はこれまで保育観を作ってこなかった自分に気づいた。今、すぐには変えられないけれど、変えようとしている自分が今はいる」「何をどうすれば良いか分からないのに、他の保育者に聞くことも出来ずに過ごしていた。自分の保育に対する不安や心配がいっぱいあるのに言えなかった。しかし今年の研修で自分の足りないところが少しはわかった」「何となく保育者になった。小学校教師を目指していたので幼稚園とはどんなところか勉強もせずにきた。毎日をとりあえずクリアーしなければという気持ちだけで過ごしてきてしまった」と、主として自分の今までの幼稚園教諭としての歩み、そして悩みが吐露された。このようなことが語られた後、他園を経験し

ているフリーの保育者から「フリーの保育者は担任と願いが一緒ではないとダメな部分がある。特に特別に配慮を必要とする子どもたちに対してはそこがポイントになることも多い」「今日の保育に関してはどうして十時半になったときに他の遊びを中断して片づけになったのか。今日の子どもたちを見ていると、運動会の練習が終わったためかクラスのあちこちで思い思いの遊びが展開されていた。それでもその時間に片づけにすることの意味を考える必要があるのではないか」という意見が出された。

「過去の振り返り」とまさに「今日の保育の振り返り」の問題が同時に出されたのである。そしてこういう時にこそ再度一日の保育の流れを子どもたちの様子を見ながら考え直す必要があるという意見が出された。他のメンバーもそれに賛同し、十月からこれらに留意し、保育を行ってみることになった。

◇十月

その後の保育の変化はドラスティックといってもよいほどのものであった。一学期をかけて少しずつ朝の子どもが遊びを選ぶ時間を延ばし、やっと十時半くらいまではそういう時間が確保されるようになってはいた。

しかし、この日を境に大きな変化があった。まず、四歳児のクラスがお弁当まで遊び続けた。それだけではなく、その日お弁当を食べる場所も自由になった。また保育室の環境にも変化が出てきた。「保育室がざわめきはじめた」とは副園長のNさんの言である。保育室の環境に「もの」が出始めた。保育室内の環境については前回の保育参加ウィークの時にも保護者に「お部屋のなかがなんだかがらんとしてお部屋にいる子どもたちもいるのだけれど、なんだか手持ちぶさただったみたい。先生方もみんな外に出払っているので、私、一緒に遊びました」と指摘されている。昨年までの保育では「子どもたちが必要な時に必要なものに出会えるように配慮する」というコンセプトはなかったのだ。

こうして一日の流れは大まかにあるものの、今までよりは活動の区切りが緩やかになってきた。日によってはお弁当の時間が十二時半頃ということもあった。さすがにその時は私も心穏やかではなかった。いくら時間の壁を取り払ったとはいえ、子どもの体のリズムを無視することはできないからである。お腹が空きすぎてしまえば、空腹感はなくなる。お弁当に誘っても「もっと遊びたい」という返事が返ってくる。しかし、その遊びをみてみると惰性で遊んでいるとも思えるようなものだったりする。こういう失敗を幾つも重ねた。だがそういうことはあっても、今までの枠を取り払ってみようと考えて実行している保育者たちの勇気には脱帽することも多かった。

こうして、三歳児、四歳児のクラスは登園して着替えを済ませたら遊ぶという生活が定着し始めた。その遊びのなかに保育者が自分のしたい活動、あるいは子どもたちに経験して欲しい活動を組み込んでやっていくということも増えた。

一方、昨年までのやり方で二年間を過ごしている五歳児のクラスは、朝の集まりだけはどうしてもはずせず、九時十五分に一度集まって出席をとり、朝の一斉活動をしてから子どもが遊びを選ぶ時間に移行するという流れとなった。子どもたちがその流れに慣れているということもあったし、親からの五歳になって朝の集まりもないというのでは余りにもけじめがないという意見もあってのことである（この園の親の考え方については前回の一〇〇巻第十号を参照頂きたい）。そんな状況の中、担任は悩んだ挙げ句、年長はこの流れで行くと決断した。結果として、九時から十時前まで園庭に出て遊んでいるのは三歳児、四歳児だけということになり、三歳児から五歳児が混ざって遊んでいる時間はその後の約一時間ということになってしまった。一つの幼稚園のなかに二つのタイプの違う幼稚園が同居しているような状態となったのである。

◇十一月

十一月の半ばには作品展があった。その直後、二十

六日から始まる保育参加ウィークをどのようにやっていくのかという準備の話し合いを持った。前回は「ともかくありのままを見て貰う」「そして、それをもとに保護者との話し合いを持つ」ということを大きな柱としていた。その結果が三勝二敗ということだったわけである。今回は少しでも自分たちの保育を「理解して貰う」ための準備を行ってその週を迎えることにした。

まず、一つの園に二つの幼稚園があるような状態をどうするかということが話し合われたが、そのために慌てて統一するのはおかしいということになり、今はまさに文字通り過渡期であるということで、その部分はありのままに見て貰うことになった。

前回は保育に「参加」して体を動かしてくださった保護者の方の多くは肯定的な意見が述べられることが多く、その一方で「参観」だけの方からはマイナス面だけを取り上げて批判されることが多かった（勿論、私たちの至らなさの結果なのであるが）。そこで今回はまず保育に保護者が参加できる工夫をした計画を立てること、次に、ただ遊んでいるだけでいいのかという意見も多く出されたことに鑑み、少しでも保護者にとって保育が分かりやすいように資料を出すことにした。

具体的には担任に保護者に分かりやすい日案と先週までの子どもの姿が見やすいような環境図を書いてもらった。私たちの園では週日案は作っているが日案は作成していない。一週間分の日案を作ることは担任にとってはかなりの負担となることであった。けれども自分たちの保育を理解して欲しいと考えるのならば、この労はいとえないのではないかと、トップダウンではあったが担任にお願いしたのである。その日に参加

される保護者には日案と環境図をお渡しする。そのことでたとえ少数ではあっても何人かの保護者の方が日々の保育が決して行き当たりバッタリで行われているのではないことをなんとか感じてくだされば、それでよし。効率は悪いが今のところそれ以上のアイディアが浮かばないのが現状であった。そのほかにも保護者も製作などの活動に参加できるように材料を十分に揃えて置くための具体案が話し合われた。

第二回保育参加ウィークを実施して

時間は九時からお弁当を食べ終えるまでとし、前回より参加時間を長くした。蓋を開けてみて分かったことは今回は「参加」するつもりの保護者がほとんどだったことである。前回、参加と参観が相半ばしていたのとは大きく異なる。お母さんたちはスラックス姿の方が多く、寒くても大丈夫なように防寒着も持参されていた。予想通り体を動かし、子どもたちと一緒に製作をされた方からは「自分が楽しんでしまいました」「子どもたちのセンスってその意外性が面白いですね」「家から持っていった廃品（牛乳パックや毛糸など）が、こんな形で役立っているのをみて嬉しかったです」「うちの子、集中しないとばかり思っていたのですけれど、ちゃんと集中してやっているのをみてびっくりしました」などなどの意見が出された。

また前回と比較してということで「年長さんが前より小さい子どもたちにやさしくなっているように思います」「六月と比べると、遊びが多様性を帯びてきたし、お部屋のなかにも色々な素材が置かれるようになってきたんですね。なぜ遊びがこんなに変わってきたのですか？　次回が楽しみです」「前回は先生が大変そうで、お手伝いしなきゃと思ったのですが、今回は手持ちぶさたで。それだけ子どもたちが色んなことをやっていましたね」「日案や環境図を見せて頂いて、子どもたちの活動の中からいろいろ引き出していることが分かりました」という意見も寄せられた。一方、数名の参加しないで見学にまわった方からは予想通り

「メリハリがない」「けじめがない」等の意見が出された。しかし、前回と変わったことは、その際話し合いに一緒に参加している保護者の方から「そういう面もあるかも知れないけれど、一日中そうではないし、トータルとしてみると、前回より育っていると思う」等の意見が交わされるようになったことである。

保護者はよく見ている。保育室の環境設定等が少なくとも前回よりはよくなっていることの指摘もあったし、さらに次回を期待しているとの声も上がった。つまり、まだまだ改善の余地があるということだ。子どもたちが自分より幼い子どもたちに優しくなったという指摘も保育者が頑張って異年齢の保育に力を入れていることに気づかれたということでもある。また一部にマイナス意見もあったが、実のところ、残念ながらそれは私たちの今の保育の実態でもある。

四勝一敗。これが今回の結果である。私たちの未熟さを十分理解した上でプラスに考えてくださる保護者に支えられての結果ともいえる。この参加ウィークがあることで保育者もまた自分の保育を振り返るチャンスとなり、自分のその時点での限界もはっきりみえてくる。次回はどうなるのか。日々の保育を大切にしつつその日を迎えたいと思う。

（鎌倉女子大学・同幼稚部）